

## 自分を持って

広島大学長 田中 隆 莊



平成四年度卒業生及び修了生を送るに当り、新しい人生に門出する諸君を思い、「自分を持って」と題して、一言所懐を述べて饒とす。人間は誰でも、自分を見つめるもう一人の自分を感じることがある。もう一人の自分とは、自分の心のこと、言い換えれば、心にかの気持ちを持ったときの自分のことである。諸君の人生が、もう一人の自分から、自分や社会を見るゆとりを持ち、心がこもった生き方であることを思うのである。

人間は、いつの時代でも豊かさを求めてきた。その手段として、知識や知見を増やし、問題を克服して、今日の人類社会に見るように、目覚ましい発展を遂げてきた。しかし、人類社会のこの発展が、次々と新しい問題を引き起こしていることも、一方の現実である。例えば、克服の目処が立たない新しい難病の増加、地球環境保全の危機など、いづれも人間の発展方法から起こった問題である。人間は、自らの発展方法として、知性を価値とし、その達成手段として合理性に基づく各種の創造的行為を行い、今日の発展を迎えた。目前の科学と技術はその象徴的姿である。

しかし、その急激な発展の結果は、人間の精神活動のもう一つの面である心の動きや思い、すなわち情と意、感性と心を価値とする手段との間に乖離を生んでい。いま私達は、和が崩壊の懸念を生んでいる。いま私達は、人間を見直し、人間を知らねばならない。

人類社会が抱える諸問題を、人間そのものの現象として、さらに人間そのものの実体として見るとき、どの問題も人間そのもの、すなわち人間の心が問題の核心をなしている。

しかし、人類社会の合理性の進行は、止めることはできない。その社会ではこれからも益々、人間の異質性が顕在することが考えられる。その異質性社会では、人間は誰も、個(individual)として自らの可能性をいかに引き出し、どう伸ばし、独立自尊できるかが問われる。しかしその一方で、その社会では、感性や心による人間関係を価値とし、自分を見ているもう一人の自分、すなわち心のこもった自分を持つていことが問われる。知性と感性の調和が問われ、合理性と心の調和が問われるその社会で、これからの人生を築く諸君には、どんな立場にあつても、もう一人の

自分を持つていことを思い起こし、自分を抽象化して見つめるゆとりをもってもらいたい。

もう一人の自分から見るとき、本学で教養を専門的に身につけた自分、専門分野の学問体系を習得した自分、学理に基づく技術を身につけた自分が、それぞれ見えるだろう。その他方には、教え導いて下さった恩師、一緒に学んだ友、同輩や先輩、支えて下さった家族、母校広島大学などが、それぞれ見えるだろう。

もう一人の自分の世界がさらに広がる時、感性と心の世界の多様多彩さに、諸君は目を見張るであろう。身の周りや地域社会であっても、広く人類社会であってもである。その諸君に対して、現実の社会は、新しい可能性として熱い期待を寄せている。諸君が、自分を持ち、固定観念から自分を解き放し、自分の可能性を引き出し、感動多き、心のこもった人生であることを祈っている。

今年度も本学から学位授与者及び修了者として、多数の諸君を送り出すことができることは、広島大学にとって最も大きな慶びである。広島大学は諸君と共に歩みつづける。諸君が世界のどこにいても、何ごとにつけて母校を思い、活躍することを祈っている。またいつでも、母校を訪ねてくれることを待っている。

最後に、諸君をここまで支えて下さった家族を始め関係者すべての方々に、諸君と共に深く敬意と感謝の気持を表し、祝辞とする。